
桜餅を頬張りながら。

黒淵 めかね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜餅を頬張りながら。

【Nコード】

N3431Z

【作者名】

黒淵 めかね

【あらすじ】

2000年は生きたとほざく…こほん失礼。まあそんな大妖・來^{らい}京^{きやう}。そんな化け物に何故か好かれたわたし・野村桜。…ラブストーリーになるのかはまだ未定。無自覚DS少女と美麗妖怪のお話。しゅのーというペンネームで魔法のいらんど様にて出筆しているものです。

貴方は誰でしょう？

「やあやあその可愛らしいお嬢さん。今日はなんて素敵なお天気なのだろうね？まさにお嬢さんみたいな天使と出会うには相応しい気候だよ。そんな日にお嬢さんと出会えた僕はなんて幸せ者なんだろうか！そしてこの僕と、こ・の・僕と！出会えたお嬢さんも神に感謝するがいいさ。普段は僕はもつと色気溢れる美女しかお相手しないからね！まさに奇跡さ奇跡！…とところでそのお礼と言っちゃあなんだが、お嬢さんの手にあるその袋の中のもので手を打とうではないか。この僕の高貴なる身には合わないかもしれないが一般庶民の限界と言うものくらいこの高貴なる僕も分かっているからね！さあだから早くお嬢さんの精一杯の供物をこの僕に奉げるがいい！」

無言で顔面に蹴りこみました。

頭が残念すぎるといくら美形でも塵に思えます。

「うーん、痛いなあ。この痛みは400年位前にこの僕の美貌に嫉妬した化け鴉に岩石ぶち当てられたときの痛みを余裕で超えるね！ひどい、ひどい、酷すぎる。まったくもって酷すぎるね涙が出そうだよ。戦国時代じゃあるまいし、お嬢さんは暴力は振るっちゃいけません！と習わなかったのかい？」

真っ赤に晴れ上がった右頬を撫でながら、相変らずのノン息継ぎでしゃべりまくる這い蹲ったままの不審者。その眼にはきらりと僅かに潤んでいる。

さつきも思ったがなんだこの男は。

いや、相当のナルシストだということとはわかる。…が、それを抜きにしても相当アブナイ。

透き通った真紅の薔薇のような、肩を流れる長い髪。

白雪のような真っ白な肌。

鍛えられたであろう、程よく引き締まった体躯。

そして、——底光りする、金の、瞳。

人外離れた容姿をもつ男は、確かにひとつの芸術のようだ。

だが、もっとも怪しいのは、…

「…一体貴方は、何者なんです？…いまどき、着物だなんて」

時代劇に出てきそうな、華美な装飾の、美しい藍色の着物。

ソレを程よく着崩し、纏う噎せ返るような甘い匂いを放つ、ありえないほどの美人。

…一番の疑問は何故、そんなにやつれて地面のど真ん中でぶっ倒れていたのか、ということだが。

「ん？僕？僕かい？僕はねえ……」

にい…と先程からは欠片も想像できない獰猛な笑み。

怪しく細められる黄金の双眼。

惑わすような、匂い立つ芳香。

——ゾクリ、と、何かが胸奥で蠢いた。

——この男が、

——欲しい。

「…っ！」

無意識に浮かんできた言葉に驚く。
邪念を払うかのように、ぶるぶると首を振る。

ありえないありえない大丈夫か自分、今日会ったばかりの人間？…
変態に何を血迷ったことを。

「僕は、…ぼくはねー……………おなかすいた…」

「…は？」

「だめだ。……ばたんきゅー」

いやそれは自分で言うことじゃないだろ、馬鹿か。

目の前の威圧感溢れていた姿は一変して鳴りを潜め、怪しいヒトは
漫画のごとくぐるぐると眼を回したかのようなアホ面で動かなくな
った。

「…ちてて、どっしりまじゅっ。」

「この胸の鼓動は…イラッとしてるからですよわかります。」

「ほら」

「うっわアああ桜餅！」

目の前に桜餅が幾つかのった皿を置いてやると一時間ほど前に見せていた言動とはかけ離れた子供らしくはしゃぐ変な着物男。

キラキラと目を輝かせている様子はありえないほど整った顔が、一瞬にして子供のように可愛らしさを帯びる。

「そんな様子にちよっとだけ悪戯心がくすぐられた。」

「…」

「うわああい…ってあれっ…あれっ？」

もうすぐで男の手が皿に触れそうになった瞬間すつと皿を遠ざけてみる。

そしてきよとんとしながらも再び手を伸ばしてくる男に、もう一度ギリギリのところまで皿を遠ざける。

「あつ、…ちよ、…お嬢さん？」

「…ふっ」

あ、やばい。はまりそうだ。

だっていい年した大人がおあずけくらった子犬みたいなうるうるおめめで見えてくるんだもの。

——愉しい。

くつり、と心の底の黒い何かが首を擡げ、チロリと舌なめずりをする。

ぞくぞくと背中を駆け巡る十二か。

……この男を……**したい……

「すきあり!!--」

「っ!!--」

しまった。

ぼーっとしていた隙に皿を取られる。

「あああ…おいしい! 美味しい美味しいよこれは! 素晴らしい! できりしやす! 餅の食感餡子の上品な甘さ…ぱーふえくと! ！本当に素晴らしいよお嬢さん褒めてつかわそう!!--」

「黙りなさい」

テーブルの墨に重ねてあつた辞書を手に取り、喧しく騒ぐ男に振りかざす。勿論、角があたるように。

「あぐぐぐぐぐう…」

床に倒れ、呻き声をあげながらごろごろと畳の上を転がりまわる男。

見事な紅の髪が乱れ、さらには、程よく着崩された豪華な着物まで

もが乱れる。

双眸を潤ませ、白い肌が見えているこの姿は、男すらも墮とせるだろう。

「何するんだいお嬢さん?!」

「煩いですから黙りなさい不審者」

「不しっ…酷いなあ僕は不審者なんかじゃないよお嬢さん第一こんな美貌を持つ不審者がこの世界に存在すると思っかい?」

息継ぎもせず一言でなにやら阿呆な発言をする男。

なんとなく気にくわないので、皿に残っていた桜餅を引つつかむ。

そして、まだ痛むであろう箇所を押さえながら、下から涙目で見上げてくる男の薄い唇に餅を押し付け、一気に啜内へぶち込む。

「むぐっ」

「…はあ」

やっと静かになる男。

私の家にやっと静けさが戻ってくる。

…なんでこんな男を助けてしまったのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3431z/>

桜餅を頬張りながら。

2011年12月11日20時53分発行